

ネオリベラルな統合モデルにおける移民コミュニティの位置づけに関する一考察
——イギリスにおけるクルド人コミュニティを事例として——

The Positioning of Immigrant Communities in the Neoliberal Integration Model
A Case Study of the Kurdish Community in the UK

高橋 誠一（日本学術振興会特別研究員／法政大学）
TAKAHASHI Seiichi（JSPS Research Fellow／Hosei University）

キーワード：ネオリベラルな統合、コミュニティの結束、参加型市民社会、ソーシャル・キャピタル

1. 本報告の主題・目的

本報告の主題は、近年のヨーロッパ先進諸国で主流となりつつある「市民的統合（civic integration）」と呼ばれる新たな社会統合のモデルにおいて、移民コミュニティがもつ／はたす役割・機能を批判的に検討することを目的とする。具体的には、イギリスにおけるクルド人コミュニティの事例を通して、今日における移民コミュニティの諸活動／実践を、ネオリベラルな社会統合という文脈と関連づけながら分析・考察する。

2. 統合政策の変化と問題の所在

今日——とりわけ、1990年代後半以降——、ヨーロッパ先進諸国ではそれまでの公式／非公式の多文化主義にかわり、「市民的統合」と呼ばれる新たな社会統合のモデルが主流となりつつある（Joppke, 2007; 佐藤, 2009）。「市民的統合」とは、①「市民」としての責任や義務の重視、②主流文化への理解や共通の価値・規範の習得、③積極的な政治・社会参加、といったアクティブ・シティズンシップの要請を中核においた社会統合のモデルであり、その背景には、1970年代後半以降に提起されるようになった福祉国家批判、と1990年代になって深刻化しはじめた「統合の危機・失敗」、という2つの文脈が存在している。

ところで、現在この新たな統合モデルに対する理解と批判の多くは、もっぱらそれを「脱国民化」にかかわる問題と、「市民性」や「主流文化」に依然として潜む「文化の中心性／非中立性」という問題に準拠しているように思われる。しかしながら、この新たな社会統合のモデルにおいては、「脱国民化」や「文化の中心性／非中立性」といった問題以上に、ネオリベラリズムを基調とした社会編成における①参加型市民社会をモチーフとした国家の機能転換、と②アクティブ・シティズンシップの要請にみられる主体性の創出、といった問題にこそ、その政治的本質があるのではないだろうか。このような問題意識のもとで、本報告では国家／社会と個人が交わる場所としてのコミュニティに着目することで、新たな統合モデルが孕む問題性を浮き彫りにしていきたい。

3. イギリスにおける統合政策の転換——「コミュニティの結束」

コミュニティは、今日のイギリスの統合政策を語るうえで重要なキーワードの1つである。とくに、2001年に相次いで発生した北部での暴動を受けて『カントル・レポート』（内務省）が提出されて以来、イギリスでは「コミュニティの結束（community cohesion）」が統合政策の中心的なスローガンとなっている（安達, 2008; 佐久間, 2011）。『カントル・レポート』では、これまでの文化的差異に対する多文化主義的政策が、結果としてコミュニティ同士が分断された状況である「平行生活（parallel lives）」を生み出してしまったことを反省的にとらえ、かわって地域社会やコミュニティの交流・結束を重要視し、それらを基軸とした統合のビジョンが描かれている。同レポートの中心的な関心は、厳密にはコミュニティ同士の関係性に向けられている。しかしながら、コミュニティは参加型市民社会／アクティブ・シティズンシップといった文脈とも結びつきながら、より広範な役割・機能が期待／要求されるようになっているのである（Rose, 1999, 2001）。

4. コミュニティの諸活動——質的／構造的な変化

では、具体的にはコミュニティの諸活動は、どのようなものとなっているのだろうか。今日、（イギリスに限らず）ヨーロッパの先進諸国における移民コミュニティの諸活動には、異なる2つの役割・機能を見出すことができる。1つは独自の文化やアイデンティティの維持・継承を目的としたものであり、もう1つは主流社会への参加や統合を積極的に支援・促進しようとするものである。このうち、本報告で着目したいのは、主に後者の役割・機能についてである。もちろん、これまでも移民にとってコミュニティは主流社会へのアクセスのための重要な資源を提供するものとしてとらえられてきた。しかしな

がら、今日そこにはある種の質的／構造的な変化があるといえる。というのも、従来においてそのような役割・機能はコミュニティの二次的な側面であり、あくまでも主流社会への参加のための非公式のチャンネルであったのに対し、今日においてそれはコミュニティに期待／要求される中核的な役割・機能の1つとなっており、コミュニティ（とその諸活動）は社会統合を促進するための不可欠の要素として位置づけられているのである。

5. 移民コミュニティをめぐる政治の批判的検討——ソーシャル・キャピタルと参加型市民社会

一方で、このようなコミュニティの役割・機能に関しては、これまで主に移民自身のソーシャル・キャピタルの有効性（あるいは、ローカルな行政との協力やその成功例）といった観点から肯定的にとらえ、評価する向きが強かったといえる（Putnam, 2000; Lin, 2001）。しかしながら、今日におけるコミュニティの質的／構造的な変化をとらえるうえでは、コミュニティ（やその活動／実践）がどのような社会的な文脈・構造のもとに位置づけられているのか、ということに着目することが重要であろう。

本報告では、さしあたり以下の3点を中心に考察・検討を試みることにしたい。まず、①コミュニティを社会統合のための重要な役割・機能を担うものとして位置づけ、彼ら自身のソーシャル・キャピタルを積極的に奨励・活用・転用しようとする動向は、しばしば公的な補助・支援の縮小という構造的な問題と表裏の関係にある。そして、②そのような公的な補助・支援の縮小は、補助金の獲得・配分をめぐってコミュニティ間の競争を生んでおり、そこには同時に新たなかたちでの政治の懐柔／介入の契機を見いだすことができる。さらに、③ネオリベラルな社会統合のモデルでは、ひとりひとりの個人（市民）に対して、コミュニティやコミュニティを通じた社会への主体的で積極的な参加が強く要請されるようになっており、統合のための努力や責任（とその結果）はこれまで以上に移民自身に帰せられるようになっている。

参考文献

- 安達智史、2008、「イギリスの人種関係政策をめぐる論争とその盲点——ポスト多文化主義における社会的結束と文化的多様性について」『フォーラム現代社会学』7: 87-99。
- Joppke, C., 2007, "Beyond National Models: Civic Integration Policies for Immigrants in Western Europe," *Western European Politics*, 30(1): 1-22.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房。)
- Putnam, R. D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。)
- Rose, N., 1999, *Power of Freedom: Reframing Political Thought*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2001, "Community, Citizenship and the Third Way," D. Meredyth and J. Minson eds., *Citizenship and Cultural Polity*, London: Sage, 1-17.
- 佐久間孝正、2011、「グローバル時代における政治と宗教——イギリスを中心に」『社会学研究』89: 25-49。
- 佐藤成基、2009、「国民国家と移民の統合——欧米先進諸国における新たな『ネーション・ビルディング』の模索」『社会学評論』60(3): 348-63。